

## [美術一家言]

## 美術館の展示札について

当館次長 成瀬不二雄

私たち古美術を専門とする美術館の館員が、よく来館者からお叱りをこらむことがあります。それは展示札に示された美術品の題名が難しすぎるということです。たとえば、大和文華館所蔵の元時代の中国陶磁の名品で、「釉裏紅鳳凰文梅瓶」(ゆうりこうほうおうもんめいびん)を例にとりましょう。この題名を読んで、すぐにその意味を理解できる人は、中国陶磁の専門家か、あるいはよほど古美術好きの人だけかもしれません。

しかし、この題名をもしわかりやすく表示するとすると、「磁器の素地に酸化銅の顔料で文様を描き、その上に透明釉をかけて還元焰で焼くと、文様が釉下で赤く発色する技法を用いており、文様としては想像上の霊鳥を表わし、器物の形は口が細くなで肩で、せたいの高い瓶」となってしまう。このように、ばかばかしく長い題名を展示札に表わすことは、とうていできないでしょう。いっぽう、古来の中国陶磁の名称は、漢字が難しくても、簡潔で合理的なものです。つまり、「釉裏紅鳳凰文梅瓶」、たったこの八文字だけで、いま書きましたような長たらしい内容がすべて含まれてしまいます。

そこで、大和文華館では工芸品などの展示札として、なるべく伝統的に用いられてきた名称を使うことにしています。ただ、漢字には必ずフリガナを付けます。そして、「釉裏紅」とか「梅瓶」とかの用語については、展示品の近くに、わかりやすい解説札を付けるようにしています。まず、この程度が古美術を専門とする美術館と観客のかたとの妥協点だろうと、私は考えています。

もう一つ例をあげましょう。大和文華館には、室町時代末期の画僧雪村の水墨画、「潭底月図」(たん

ていげつず)が所蔵されています。これは縦長の絵の下部に、水面に映じる月、舟に乗る人物、そして遠山などを減筆体の墨絵で簡潔に表わし、その上(と言うよりもほとんど画面一杯に)、「潭底月」と大書しています。そこで、水墨画であるとともに、一行書の墨蹟とも言える作品です。

もう大分前のことになりますが、かつてこの作品を展示していたとき、ある観客のかたが展示札に並記してある英文の題名「MOONLIGHT REFLECTING ON THE WATER」を読まれて、和文題名よりもこの方がずっと意味がよくわかると言われたことがあります。しかし、「潭底月図」は決して単に「水に映じる月の光」という意味だけではありません。英文題名がこのようなになっているのは、ただできるだけ簡潔に図柄の説明をしようとしたためなのです。

潭底の月とは「誰か知らん潭底の月は、もと屋頭の天にありしを」という古句からの引用です。つまり、「水面に映じた月は天空に実在する月の影にすぎないから、物事は根本を見極めることが大切で、影に迷ってはならない」ということをこの言葉はさとしたもので、これは禅宗でよく説かれる教えなのです。だから、この雪村の絵の題名はどうしても「潭底月図」でなければならず、「MOONLIGHT REFLECTING ON THE WATER」だけでは不十分と申せましょう。

美術館、ことに主に古美術を展示する美術館において、観客の方に対して、展示札をどのようにして簡潔で、適確で、しかもわかりやすいものにするかということは、おおげさと言えば、美術館の永遠の課題でしょう。そして、私の考えるところでは、どうも簡潔さと適確さとは、わかりやすさという

(展示札例・日本文)

ゆうりこうほうおうもんめいびん  
釉裏紅鳳凰文梅瓶  
いんげつず  
景徳鎮窯

中国・元時代

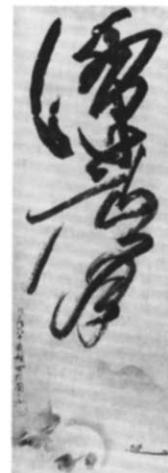
高 39.5cm.

胴径 21.6cm.

大和文華館蔵



釉裏紅鳳凰文梅瓶



潭底月図 雪村筆

こととたがいに矛盾する条件であるようです。くりかえしになりますが、「釉裏紅鳳凰文梅瓶」というたった八文字に陶磁器の文様や形態や技法についての多くの情報が含まれることは、驚くべきです。専門家や陶磁器の愛好家ならば、現物を見なくても、この題名を読んだだけで、その大体の姿を想い浮べることができそうです。また、「潭底月図」と聞くと、専門家ならばその意味と大体の図様がわかりますし、一般の方でも、それが何か難しい東洋思想に関係した絵だということは、感じとられることと思います。

かつて、展示札をできるだけわかりやすいものにしようという運動が、多くの美術館でありました。私のうろおぼえにすぎませんが、何年か前にあの奈良国立博物館で毎年おこなわれる「正倉院展」において、展示札を現代語で書こうという計画が実施されたように、記憶しています。しかし、この計画は記述が長くなるばかりで、どうもうまいかなかったようです。

そこで、美術館の展示札において、先人の知恵としての伝統的な名称は、部分的な改革を加えることはあっても、やはり保存されねばならないと、私は考えています。しかし、フリガナは必ず施されね

ばなりません。また、難しい用語のやさしい解説札をおくことも、必要不可欠でしょう。

ところが、かつての研究者や美術館の学芸員の間では、展示札の題名にフリガナを振っても、それは内容を理解したことにならないから、無意味だという意見が根強くありました。私も若いときに、先輩からよくそういう意見を聞かされたものです。しかし、あえて失礼な言い方をしますと、私はこれを専門家の思い上がりだと思います。

難しい展示札の漢字にフリガナが振ってあれば、それを見た人は少なくともその読みかたがわかり、辞書でそれを調べることができます。そのそばに用語についてのやさしい解説があれば、さらによいことで、観客は自分の知識を広く深くすることができるでしょう。美術館というものは単なる展示施設であるばかりでなく、もちろんサービスにも心掛けねばなりません。しかし、美術館は教育機関のひとつでもあります。展示札の問題は教育機関としての美術館にとって、自分の仕事を反省するよい機会になると思います。

季刊 美のたより No.111

平成 7 年 5 月 18 日

発行 大和文華館